

同じ思い、同じ愛、心をあわせて

さて、今日からフィリピの信徒への手紙の 2 章に入ります。この手紙はちょうど 4 章にわけられるので、起・承・転・結でいうならば、「承」の部分にはいることになるでしょうか。実際、この 2 章の部分は、1 章の挨拶と感謝の部分、そこで述べられたパウロの確信、「わたしにとって生きるとはキリストであり、死ぬことは益なのです」という、キリスト・イエスに結ばれた福音人生において「万事は益」となるという驚くべき所信表明があったわけです。そして返す刀で、という言い方はちょっと変かもしれませんが、今度は手紙の受取人であるフィリピの信徒たちにむけて、1 章 27 節、「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい」と勧めます。これはキリスト者の生活のガイドラインともいうべき指示です。半田の信徒の方々よ、「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい」という招きです。ではそれは具体的にどういう生活ですか？わたしたちはあなたとどんな同じ戦いを戦うのでしょうか。「起こり」から始まった手紙は、いよいよその内容を「承って」2 章に入り、このキリスト者の信仰生活、教会生活の指導がさらに深く、広く、大きく展開して手紙の本論、つまり福音によって生かされる信仰者の生きざまに触れてゆきます。今朝はここから御言葉に聴きたく願っています。

古典古代のギリシア世界は雄弁術が栄えた時代ですが、パウロはこの意味でも一流の教養人でした。まず 1 節ですが、ここを新共同訳聖書はスマートに訳していますが、オリジナルに近づいて訳しますと、ここは「もしも～あるならば」というフレーズが 4 回、畳み掛けるように使われています。

そこで、もしあなたがたにキリストによる励ましがあるならば、

もしあなたがたに神による愛の慰めがあるならば、もしあなたがたに霊による交わりがあるならば、もしあなたがたに慈しみと憐みがあるならば、といった感じです。これは反語的な表現であり、当然、与えられていますよね、あなたがたには！という強い迫り方です。これ以上は与えようがないほどに、あなたがたにはキリストによって、神によって、聖霊によって、あふれんばかりに神さまとの交わりが与えられています、この神さまが差し出して下さっている恵みに立って、同じ思いとなり、同じ愛をいただき、心をあわせ、思いをひとつにして、わたしの喜びを満たしてください。と文章はながれてゆきます。この表現は、心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの主である神を愛しなさい、が下敷きにあるでしょう。このときフィリピの信徒たちについて、パウロが問題に感じていたのは彼らの中にある利己心、虚栄心でした。要は自分に集中している。そのままだもわかる言葉ですが、パウロはダメ押しするように、めいめい自分のことばかりではなく、他人のことにも注意を払いなさい。そして、それはキリスト・イエスにもみられるものです、とつなげ、主の従順と謙遜が、わたしたちキリスト者のすべての行動の模範、モデルであることを示します。キリスト・イエスを例に出したパウロはさらに古代の讚美歌であったともいわれる有名な6節以下のキリスト賛歌を展開しますが、それは来週にとっておき、わたしたちが今日、ここで確認したいのは、すべてのことキリストを模範とせよ、という勧めです。この個所は、キリスト・イエスに結ばれて救われた者がどのように歩むか、生きるかという、その後の生活について大切な示唆を与えます。1章の最後に、パウロが言っていた、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているの

です、と語っていたこと。これを生活の中にどれだけ反映させているかですね。このことはわたしたちが常に自分自身に問わねばならないことです。人に要求することではありません。

1 節でパウロが、フィリピの信徒たちに確認させたように、キリストから励ましが与えられ、神から愛の慰めが与えられ、神の霊による生ける神とキリストとの交わりが与えられ、慈しみと憐みの心を備えられたので、あなたがたはキリスト・イエスを信じるだけでなく、苦しむことも出来る、それも恵みとして与えられていることなのだ、パウロはそう考えています。そして、その苦しみとは、わたしたちが自分自身から離れることなのです。それは結果的に、わたしを神とともに生かすことになるゆえに、恵みだとパウロは言い切ります。利己的な思いや、虚栄心からする行動から離れて、神を愛すること、それは具体的には神と一緒に生きるように賜っている隣人を愛することを指しています。そのために神さまは、わたしたちが共通に立つことの出来るプラットフォームを作って下さっている。それはキリスト・イエスの十字架のもとです。わたしたちひとりひとりがわたしの経験や、わたしの願いや、わたしの思いに立ち続け、自分の思い通りに生きようとする限り、そこに一致は生まれません。同じ思いというのが、わたしの思いに従えというのであれば、奪う者と奪われる者、使役する者と使役される者、仕えさせる者と仕える者がそこに生まれるでしょう。とくにフィリピの信徒たちの生きていた時代の社会は身分制社会でしたから、自由人と奴隷、ローマ市民権を持つ者と持たない者、さまざまな区分は今わたしたちの生きている社会の比ではありません。しかし、そこにキリストの十字架が打ち立てられるとき、すべてが変わり始めます。十字架は死刑の道具でした。そこで神の子がわたしに代わって苦しみの末に死を遂げました。わた

しを神につなぎ、神の子として歩ませて下さるための贖いの死でした。これはキリストによるわたしたちへの励まし、あなたのこれまではわたしと共に十字架で死んでいますよ、あなたは新しい人間ですよ、という励ましであり、神による愛の慰めそのものです。ここで使われている「愛」は好き嫌いではなく、「アガペー」という神さまの「愛」をあらわす時に用いられる言葉が使われています。それはわたしたち罪びと、価値無き者を、愛に生かす神の無償の贈り物を示しています。それを恵みと言いかえることも出来ます。神の霊が、わたしたちにそれを教え、生かします。パウロはいつも神から始めて神に帰ります。自分を第一にしません。わたしたちに、同じ思い、同じ愛を、心をひとつに、と語るのは、それを可能にするただ一つの場所であるキリストの十字架の許に逃れてきなさいという招きです。自分のなかに頑なに立とうとせずに、わが・ままな生き方ではなく、キリストの御足の跡を追うことで、わたしたちは神の御心に沿って歩むことになる。この手紙から、わたしたちの信仰生活にとっても決定的なのは、信仰とは従順、神の御心に服従することだと示されます。ただ服従というと、反射的に、わたしたちの中にある神に反するものが叫びだします。自由がいい、好きにやらせてほしい、それは自分の好きなように生きたい、やりたいことをやりたいというあり方です。しかし、そういう利己的な思いは、つまるところ、わがままな人間、フリーダムな人間をたくさん生み出したただけなのではないか。自己実現というスローガンによって成功すれば自分を誇り、失敗すれば自己責任という言葉が当たり前のよう語られる。これは呪いです。キリストの福音はそこからわたしたちを解放します。それは自分の命を分かち合い、ゆずりあい、学びあうことによる方向です。ふたつのパンと5匹の魚に通じる分かち合いの奇跡の

方角です。いまわたしたちは受難節を歩んでいます、キリストの戦いとは神の意志への絶対的な服従でした。それが誘惑との闘いです。パウロもまたそこで戦っています。一致のための戦いです。むろん、わたしという人間は、あなたとは違う。違いをあげつらっていけば幾らでもあげられる。しかし、同じになれる場所がある、十字架のもとにわたしたちの席が用意されている。その場所を用意にして下さるためにこそ、イエスさまは十字架にかかれた。そこがわたしたちの指定席なのです。賜物は違います。境遇も違うでしょう。年齢も性別もさまざまです。しかし、キリストを頭として体のようにひとつとされるのが教会の特徴です。キリストを頭とする、キリストに服従することを第一とする。この同じ思いに立ち、キリストの愛に生かされるならば、そこに、主にある兄弟姉妹という新しい群れが形作られていく。神の家族、神の民の群れが形作られてゆく。主に召し集められた群れである教会はそのようにして交わりに生きることを第一とするチャレンジを続けてきました。この場所で、わたしたちはキリスト者になってゆく。キリスト者として用いられてゆく。祈り、祈られ、仕え、仕えられる、そのような自由で、自発的な時間や能力や財産のささげ方によって、教会はこの世に対して、自分のためだけに時間や能力を使うのではないあり方、キリスト・イエスに結ばれることによって、一致を表してゆく生き方を表しているのです。このすべての基礎となるために、御自分を苦難のすえに十字架に置いて下さったわたしたちの救い主イエス・キリストの御名を崇めます。この方を愛し、いよいよ主を知る喜びと知恵に満たされるよう、祈り願います。

お祈りいたします。